



Title	楚辞と漢賦
Author(s)	財津, 桃溪
Citation	懷徳. 1932, 10, p. 64-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88876
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

楚辭と漢賦

六四

一、序 説

春秋戰國の時代（西紀前七二〇—二五六）は、言論界に思想界に、潑刺たる生氣漲つた時代である。周室の威令漸く行はれずして、綱紀禮法其紐を解き、言論思想の自由はその世態に刺戟せられて、諸子百家相踵で出で、各其説を述べて相譲らず、之を筆にして後世に遺したのである。故に當時の散文界は、紅紫とりごりの妍を競うて、空前の盛期を現出したのである。會同聘問の禮廢れて後は、詩三百篇の緒餘を繼ぐものもなく、従つて韻文界は極めて寂寞たるものであつた、此時に當り、獨り南方楚國の天に、萬丈の光燄は揚つたのである、これ即ち屈原一派の賦である。

賦は韻文の一體で、不歌而誦者謂之賦（漢書藝文志）は、諷誦の方面より立てた説で、賦者敷陳之稱、古詩之流也。（摯虞文章流別論）とか、賦者鋪也。鋪采摛文。體物寫志。（劉魏文心彫龍詮賦）とかは、其形體上から見た考である。賦の生成を考ふる上からいへば、更に深き考察を加へねばならぬのであるが、賦の性質を知る上からいへば、兩者を合せて、鋪采摛文、不歌而誦者謂之賦といつてよろしい。尤も賦にも種々の體があつて、その或ものは歌より變化して、歌はば歌ふべき性質を具へて居

るけれども、大體から見れば、かく言つて差支はあるまいと思ふ。

屈原は楚と同姓の貴族で、國歩艱難の際に出で、讒にあひ、身誅けられ、誠忠純粹の心を以て、君を思ひ、國を憂へ、其苦衷を賦に託したのである。北方に源を發した詩は、その特有の詩形によつて親を怨み、君を怨みて、忠厚の意を致したものの、其人に乏しくない。屈原も亦獨特の詩形に於てその後を繼いで、惓々の情をあらはしたのである。即ち騷詩の變なる所以である。人は楚の人である、語は楚の語である、詠ずる所は楚地の風物である。故に世之を稱して楚辭といふ。楚辭の語は、何人か言ひ始めたか不明であるが、史記の張湯傳に、買臣以楚辭與助俱幸。侍中。爲太中大夫。と見えてゐる所から見れば、晚くとも、武帝の時代には、既に此名があつたものと見ゆる。屈原宋玉等の作、及賈誼、淮南小山、東方朔、莊忌及自身の屈原の意を悲みて作れる篇を集めて、分つて十六卷となし、之に楚辭と命名したのは、宣帝の時の劉向が始めである。恐らく向は世に稱せられて居たものを襲用したものであらうと思はれる。漢代に楚辭がもてはやされた事は、漢志によれば、屈原、唐勒、宋玉等の人を除きても、なほ六十五家九百五十九篇で、歌詩の廿八家三百十四篇に比すれば、三倍強（篇數）に當つて居ることを見ても分る。又文帝の如きは大に之を好みて、自ら其の體にならつた作をなし、淮南王に命じて離騷傳を作らしめ、（淮南王安傳）朱買臣等を召して楚辭を言はしめしが如き、又宣帝が、よく楚辭をなすもの九江の被公等を召して誦讀せしめし（王褒傳）が如きを以ても見るべきで

ある。かくして賦は、當時の詞客大人を風靡したのである。漢代の賦には、形式より見て、楚辭の體を踏襲せるものと、更に變化發展して獨特の體製を有するものとの二者がある。その後者に屬するものが眞に漢賦の正體と云ふべきものである。この楚辭と漢賦とは、更に後代に及びて四六駢儷體の文をはじめ、種々の方面に影響を及ぼして居るのである。故に此兩者は、支那文學史上に重要な地位を占むるものと云はねばならぬ。今この兩者をとりて、各その起れる所以、その特質、その變化の徑路を明らかにし、併せて時代と文學との關係を見たいと思ふ。

一、楚辭

(一) 春秋時代の楚國

楚國は、戰國時代にあつては、今日の湖北湖南に更に河南の一部を加へて、版圖廣大な南方の雄であつた。がそのこゝに至るまでには、多くの歲月と、多くの偉大なる人物の努力が不斷に拂はれて居る。我等は今楚辭が起る以前に於て、楚國が如何なる情勢であつたかを見る必要がある。偉大なる藝術の出現は、何等の蓄積なくして出來得べきものではないのである。

楚は禹貢荊州の地で、蠻夷苗族の居る所であつた。語言通せず、風俗様を異にし、時に出で、中國を侵したことが見ゆる。(商頌殷)史の傳ふる所によれば、周の成王の時、文武勤勞の後嗣を擧げて、

諸國に封するに及び、熊繹を楚蠻に封じ、封するに子男の田を以てす、丹陽(湖北省)に都す。(楚世家)と見えて居る。思ふに、熊繹をこゝに封じたるは、蠻民を統御して、ながく周室に患なからしめん爲であつたと考へられる、受封の初めにあつては、所謂筆路藍縷、桃弧棘矢、山林を啓き、國土を擴めるに力め、五代の孫熊渠の時代には、頗る江漢の間に民心を得、その力を恃みて「我蠻夷也。不與中國之諡號」(楚世家)といふに至つた。かくして、其勢力は、漸次周室をして危惧の念に堪へざらしめ宣王の時、師を興して之を征し、蠢爾たる蠻荆、こゝに其威に服したとはいへ、(小雅采芣)平王の時は漸次中國を犯し既に國の戍をして、懷哉懷哉曷月予還歸哉(王風揚之水)の歎あらしめたのである。十七代武王の時に至つて、國勢漸く張り、其の三十五年、兵を率ゐて隋を伐つた時、隋をして王室に請ふて、其號を尊くせしめやうとした。周室は之を許さなかつた。楚王は怒つて、祖先以來の功績を述べ、許さずば許さざれ、我自ら尊くせんのみと豪語し、僭して王と稱するに至つた。爾來名君賢佐相承くるも、遂に其尊號を改めず、熊渠は、自ら蠻夷といひ、武王は我自ら尊くせんのみと云ふ。不平鬱勃、侵略の氣、自らこゝに雲蒸せるを見るべきである。春秋桓公二年の條に、蔡侯鄭伯會于鄧の記事がある。左傳は之を解して、蔡侯鄭伯會于鄧始懼楚也。といつて居る。蠻夷何をか爲さんと、敢て眼中に措かざりし楚國が、今や一大敵國として忽然と眼前に現れ來たのである。武王の子文王に至り、都を郢に遷す、(湖北省荊州府近傍)文王蔡を伐つ。春秋は書して、秋九月荊敗蔡師于莘といふ。

楚が春秋に見えたのは、實に之を以て嚆矢とする。此後中國との交渉も起り、國威は益々揚り來つたのである。成王十三年、鄭を伐つ。春秋は書して、楚人伐鄭といふ。こゝに今迄荆と記されたのが始めて號を改めて楚と記されてゐる。成王十六年、齊桓公、中國諸侯の聯合軍を率ゐて楚を伐つた時、楚を數むるに周賦王室に入らざると、昭王南渡して歸らざるの二事を以てした。その答はかうである。貢之不入。寡君之罪也。敢不供給。昭王之不復。君其問諸水濱。（左傳僖公四年）と、その辭の傲岸なる、やがて一統の實を舉げざれば已まざるの概を示して居るのである。成王三十三年、魯公二十一年に至つて、春秋はこゝに始めて楚子會盟の事を舉げて居るのである。熊繹楚の地に封せられて、五百歳、楚が中國の檜舞台に立ちて縱横の活動をなすに至つたのは、こゝに始まるのである。五百歳の年月は實に潛勢力養成の時代であつたのである、この後、中國との交渉は日に頻繁となり。泓の戰、城濮の戰を経て、樽俎折衝、亦昔日の蠻夷に非ず、莊王立つに及んで、兵を周郊に觀して、遂に鼎の輕重を問ふに至つたのである。春秋によれば、楚が滅して我手に收めたる江漢の小國は、約四十餘を算するのである。興國の氣運、上下に充滿して、旭日昇天の勢であつた。これを戰國の末、國勢漸く凌夷するに比すれば、其氣象隆汚、日を同じくして談るべからずである。興隆の運人之を啓く、然らば此間に於ける楚國君臣の狀如何。

成王の許を伐ちし時、許男面縛して壁を銜み、大夫衰經し士は襯を與するの狀を見て、其故を逢伯

に問ひ、微子啓の故事を聞きて遂に許を屠らざりし話や、（左傳僖公六年）莊公が鄭を伐ちし時、鄭伯肉袒羊を牽いて迎へしを見て、左右の言を斥けて、之に平を許した話や、（左傳宣公十二年）其他莊王の宋を伐つた時、子を易へて食ふの慘狀を見て、軍を引いて歸りしが如き、共王の陳を征せんとして其喪を聞いてやみしが如き、皆情を知り義を重んずる行といふべきである。かくして徳立ち、刑行はれ、政成りし時（左傳宣公十二年）民其治に服し、卒乗輯睦し、内治軍政、間然する所なきまでに至つたのである。これ全く、その君の絶えざる教訓の賜である。此等の君主を輔佐して、治績を挙げしめし各臣は、王孫圉の所謂楚國の寶たる觀射父、左史倚相、（國語楚語）は更にもいはず、鬻拳、子文、蘇從、伍舉、蔣掩、申叔時等で、その献替匡救の事實は、左傳國語の詳に傳ふる所である。

多年中國との頻繁なる交渉は、嘗て彼に蠻夷視せられ、且自ら蠻夷視せる楚國をして、學問に於て思想に於て、全く蠻夷の域を脱せしめたのである。我々は今少しく此等について調べて見たいと思ふ。先づ詩に就きて見るに、詩は諸侯會合の時、朝廷樂に和して、其儀を助けたものである。且つ左傳の傳ふる所によれば、各國聘問の禮、その揖讓周旋の際、必ず詩を賦して其志を述べたものである。此等の點より考ふれば、當時の諸侯卿大夫が、これに習熟することは、必要缺ぐべからざることゝいはねばならぬ、楚國の君臣も、中國と相交通するに至つては、必らず之を學習するに力を用ひたに相違ない。昭公十二年の條には、三墳五典八索九邱に通じた左史倚相の話が出て居る。其他詩を引いて規

諫諷諭したものは、其例に乏しくない。宣公十二年の條には、孫叔の元戎十乘以先行の句を引きし、ことを挙げ、成公二年の條には、令尹子重の濟々多士文王以寧の句を引きしことを載せ、宣公十二年には、申叔時の立我蒸民莫匪爾極を採りし事を記し、又莊王の載戢于戈載櫜弓矢等を挙げたことが見て居る。これ等の事を以て察するに、他の中國諸國と同じかりしことを知る事が出来る。ことに國語に見へて居る申叔時の詩禮樂に關する思想は、實に立派なものである。その文を引けば

士亶傳太子箴。問於申叔時。叔時曰。敎之春秋。而爲之登善而抑惡焉。以戒勸其心。敎之世。而爲之昭明德而廢幽昏焉。以休懼其動。敎之詩。而爲之導廣顯德。以耀明其志。敎之禮。使知上下之則。敎之樂。以䟽其穢而鎮其浮。敎之令。使訪物官。敎之語。使明其德。而知先王之務。用明德於民也。敎之故志。使知廢興者而戒懼焉。敎之訓典。使知族類行比義焉。若是而不從。動而不悛。則文詠物以行之。求賢良以翼之。云々 且夫誦詩以輔相之。威儀以先後之云々

これ等このことを以て見るも、如何に倫理道德に關する思想が發達してゐたかと云ふことを窺知することが出来る。

次に楚國に起りし詩歌は如何。詩經には楚風と稱するものはない。之に就ては、或は孔子刪詩の際、僭王の罪を罰すると云ふ意味で、其の詩を棄てられたと云ひ、或は楚俗蠻にして採るべき詩が無かつたといふ。(前者鄭玄詩譜、後者顧炎武日知錄)種々の説があるが、其正風中に、江漢の域になれる漢

廣、江有記の篇があることは事實である。これ等は、北方の影響を受けて成つたものであらうと考へられる。其他で、最も信を措くに足るべきものは、論語の鳳兮の歌。鳳兮鳳兮。何德之衰。已而已而。今之從政者殆、而して孟子の滄浪の歌。滄浪之水清兮。可以濯武纓。滄浪之水濁矣。可以濯我足。であらう。兩者は多少形式を異にして居るが、兮字を踏んで居ることは共通である、又滄浪歌は、後に述ぶるところの離騷の形式に類似して居る。屈原より稍々後れて、荀卿の作がある。これ等は何時作られたものであるかは明瞭でないが、その成相俛詩は、恐らく晩年境遇をうけし春申君の死後、蘭陵に家せる頃に出来たものであらうと思はれる。成相俛詩は、君臣治亂のことを論じて、自己の意を述べたもので、その辭は到底屈原の敵ではないが、其の思想及古人を引いて例證とする措解の方法は兩者よく相類似して居る。賦篇は一種の謠といふべき形を成して居る。荀子の作が屈原の影響を受けて居るか否か、たゞ時間の上のみでは定めることは出来難いのであるけれども、兩方小歌或は亂といふ共有のものを有する等の點より考ふれば、當時楚地方に比較的長篇の韵文が行はれて、兩者各別に其影響を受けたものではあるまいか。其の措辭の上の差異は、各天賦の才力によつて其の表現を異にしたもので、これが又博學にして道德家たる北方の儒者と、多感にして熱情家たる南方の忠臣との差異を示して居るのではあるまいか。

歌に最も深き關係を有する音楽は如何、莊王は左に鄭姬を抱き、右に越女を擁して、鐘鼓の間に座

したといふ。(楚世家) 又成公九年左傳には、南冠して囚はれたる鍾儀が、晉侯の有司にその族を問はれて、伶人也と對へ、能樂乎と問はれて、先父之職官也、敢有二事と答へ、琴を與れられて、南音を操つたことが記されてゐる。又哀公十八年には、晉の樂官師曠が、南風北風によつて、楚師の功なきを豫言した記事が載つて居る。孔子歿後の正樂が楚に入つた記事によつても明かである。これ等のことによつて考ふれば、楚國宮廷には、鄭衛の音も這入つて居たのであらうし、中國の雅樂を掌つた樂官もあつたのであらうし、又特徴ある南風は晉にまでも知られて居たことがわかる、詩歌音樂が、祭祀及び饗宴に用ひられたことは、各國皆同じく、楚國に行はれて祭祀の有様は、九歌の詩篇によつて窺ふことが出来る。又饗宴の状態||宮廷生活||は招魂大招等の篇にあつて見ることが出来る、たとひこれ等が多少の誇張に失するところはあつても、其歌の種類、樂器の種類等は、これ等によりて推測することが出来るのである、以上を以て見て見れば、學問といひ、思想といひ、詩推といひ、音樂といひ、光彩陸離たる楚辭を生み出すには十分の素地をなして居たのである。

(二) 屈原略傳

戰國に入つても、楚國尙南方の雄として侮るべからざる勢力を有して居た、が悲しいかな、既に老いて居る、新興の秦にひた押しに押されて足元が次第に浮いて來た。屈原は實に此時に生を享けたのである。

屈原名は平、字は原、楚とは同姓の貴族である、元和姓纂によれば武王の子瑕采を屈に食む、因て氏となす、屈重、屈蕩、屈建、屈平、皆其の後なりと見て居る。由來屈氏には名臣賢佐として名を挙げたものが少なくない、屈原は實にその血を承けて生れ楚の王室とは切つても切れぬ縁を有つて居る、其の生誕死歿の年月は明でないが、其作離騷に、攝提貞于孟陬兮、惟庚寅吾以降、といつて居る。攝提は寅の歳である。屈原の經歷に基づいて其の歳を求むれば周顯王廿六年戊寅の歳がそれに當るらしく考へられる（³⁴³BC 皇紀三一八第六代孝安天皇五十年）かくすれば懷王の後を承けた頃襄王の立つた年で四十六才といふことになる。それから江南に放浪すること數年、其の死の頃は襄王の十年頃に當ることとなり、六十才近き壽を保ちし事となる、王闔連等も、其生年をこゝに取つて居る、（楚辭註）蓋し當らずと雖も遠からざる推測と考へられる。其の父母のことも只だ朕皇考曰伯庸（離騷）に見えてゐる丈で其他のことは知る由もない。史記の屈原略傳によれば屈原始め懷王に事へ其の左徒となる。博聞彊志にして治亂に明に辭令に嫺ふ。入りては王と國事を協議し嫌疑を決定し出でては賓客に接遇し諸侯に應對す、王甚だ之に任す、と記されてゐる。恐らくの此の左徒とあつた時が屈原最得意の時代で惜往日の篇に、受命詔以昭時。奉先功以聖下と追懷して居る時である。史に據れば懷王は其の十一年に従約の長となつて居る。恐らく懷王得意の時代も亦此時であつたらうと考へられる、即ち此時に在りては君臣の呼吸がピッタリ合つて屈原には國運伸展の期待が満ちて居たであらう。が併し

此の希望の時代は長くは續かなかつた。忽ち姦人の嫉む所となつて讒者の舌は其寵を奪ひ去つたのである。史記はいふ。懷王嘗て屈原をして憲章を作らしむ、藁を屬して未だならざるに、上官大夫見て之を奪はんとす、屈原與へず、因て讒して曰く、王屈平をして令を爲らしむ。一令出づる毎に平其の功に伐りて曰く、我に非らずんばよくなすなきなりと。王怒りて屈原を疎んず。と。懷王の十六年に秦は楚齊の好を絶たしめんが爲に張儀を遣して利を以て王に陥らしめ、賄賂を以て貴臣を買收して見事にその目的を達したのである。これ等の事實から考へて見れば、屈原が左徒となつたのは懷王十二年左右の事で、其の讒者の爲に失脚したのは齊と絶つた十六年以前の事であつたらうと思はれる。史記の所謂疏は其の信を奪つた事で、離騷に「余雖好修姱以鞿羈兮、謇朝諝而夕替、既替余以蕙纒兮、又申之以攬茝」といつてゐるのは、恐らく此の時の事で、替は乃ち廢の義である、其の三閭大夫となつた年月も知り難い、屈原既に職を失ひて榮辱忽ち地をかへ、朝に立ちて國事を談する自由は奪はれ王の心は讒人の亂す所となつて、歩一步危地に踏み込みつゝ、之を覺ること能はざる状態である。清白の賢を抱きて國を憂い君を愛する屈原の心事は蓋し推測するに難からぬ。於是憂愁幽思して千古の雄篇離騷はなつたのである。離騷の意義については種々の説があるが、離騷者離憂世といふ史記の解が最も當つてゐる。懷王十六年張儀楚に至つて後の状態は、千載の後史を讀むものになは當時の事を追懷して切齒せしめる。その懷王に説くや巧言令色王の名譽心をあふり貪利の念を利用して願はく

ば祭高於の地六百里を献せんといふ。懷王喜んでその請を容る、陳軫等諫むれ共聽かず、一將軍をして張儀に従つて秦に行きて地を求めしむ。張伴り酔ふて車より墜ち疾と稱して出でざる。こと三月、懷王は齊と絶つ事尙薄くして未だ秦を喜ばすに足らずとし勇士を遣はして齊王を辱しむ。齊王大に怒り楚の符を折りて秦に合す、張儀起つて朝し楚の將軍に謂つて曰く、子何ぞ地を受けざる、某地より某地に至る廣袤六里、と、將軍歸りて命を懷王に復す、懷王怒り大兵を起して秦を伐ち却つて大敗して甲士八萬を失ひ大將軍屈匄、漢中の郡悉く秦の手中に落ちたのである。楚國は兵を盡して復び秦を襲ひ又藍田に大敗す、韓魏楚の困阨を見襲ふて鄧に至る、楚兵を斂めて歸る、尋で秦約して漢中の半を分ちて楚と和せんとす。懷王曰く、地を得るを願はず願はくは儀を得て甘心せんと、儀至る、王囚へて之を殺さんとす。儀斬尙鄭袖に賂して、却つて王の歡心を得、王に説くに從約に叛いて秦と親み婚姻を約せん事を以てす、王儀を宥して去らしむ。偶屈原齊に使して歸り大に其の不可を諫む。王悔いて儀を追はしめしも遂に及ばず。何といふ愚さであらう。堂々たる大國が一張儀の三寸の舌端に翻弄せられて滅亡の道を急ぐ、鄭袖にまどひ奸臣に迷はさるゝ懷王は全く曩の屈原を重用して治を謀つた人とは別人の感がある。之を眼前に見てしかも之を匡救するの道を得ざる屈原が斷腸の苦しき思に惱んだ事は想像に餘りあるのである。其後國運は日に非にして遂に列國の怒を買ひ亦如何ともすべからざる状態に立到つた。懷王の三十年秦は書を遺つて武關に合して盟を結ばん事をいひ送つた。昭睢屈

原王を諫めてその行を止めんとしたが、王の小子蘭は秦と好を絶つの不可を説いて行かしたので、王は遂に秦に入つたのである。秦は武關を閉ぢ王を伴ひ西咸陽に至り章台に朝せしめて藩臣の如くし巫黔中の郡を割かん事を求む。王許さず、秦之を留む。かくて太子齊より還り立つて王となる、之が頃襄王である、其弟子蘭令尹となる。懷王亡げ歸らんとして遮られ趙に走りて入れられず魏に走らんとして捕へられ遂に秦に入り憂憤病をなして死したのである。屈原離騷を賦して王の一寤を冀ひしもこゝに至りて全く水泡に歸し終つたのである。剩へ令尹子蘭の怒に觸れまた頃襄王に讒せられ遂に江南に放逐せられたのである、原江南に彷徨する事十餘年此間楚國の國勢は益々蹙まりその滅亡も期して待つべき程となつた。屈原煩亂憂悶遂に千古の恨を吞みて汨羅に投じたのである。以上は史記の傳ふる所によつて屈原時代の楚國の情勢を敍したのであるが、これ等に依つて見れば屈原の賦は生れざるべからずして生れたと云はねばならぬ。

屈原の遷移放流に關しては古來學者に種々の説があつて略四種類程提供せられてゐる。まづ九章の地名の考ふべきものに就いて考へて見るに、抽思、有鳥自南兮、來集漢北。望南山而流涕兮。臨流水而太息。通行本作北山洪興祖曰一本作南狂顧南行聊以娛心兮。等の語があり、又悲回風には浮江淮而入海兮、從子胥而自適、望大河之洲諸兮、悲申徒之抗迹。等の語がある。抽思の句によりて考へて見れば、自南といひ漢北といひ望南山といひ狂顧南行といひ、屈原は楚郡を離れて漢水北方の地に在つたことが分る、又

悲回風について見るも、淮水發源の地黃河との距離さまで遠からざる地點に在つた事が推測せられてこれを裏書してゐるのである。

次に其の語句について言へば、抽思の昔君與我誠言兮、曰黃昏以爲期、羌中道而回畔兮、反既有此他志、の如き、又茲歷情以陳辭兮、蓀詳聲而不聞。の如き、又悲回風の惟懷佳人。之獨懷兮、折芳椒以自處。の如き、又驟諫君而不聽兮、重任石之何益。等の如く語意極めて懇切である、此等の點から考ふれば此二篇は懷王の時王を懷つて作つたものと考へられる、頃襄王と屈原との關係はさまで深くないのであるから、これ等の語句は襄王に對して發せられたものとは思へぬ。かく論じ來れば懷王の時一度移されて漢北に在つた事があるといふ蔣驥等の説は成程と頷かれる。此時の楚國の狀態を見るに、齊に親しむか秦に親しむかの二つの方法があつたやうで、國內の政治家は親齊派と親秦派とに分れて居て、屈原昭睢等が親齊派の牛耳を執り、上官大夫靳尚子蘭等が親秦派の張本で、その親秦派の自己の名譽利欲の念がこれにからまつて讒謗中傷となつてあらはれ、遂に親秦派が勝を制して眞に國家を憂ふる親齊派の屈原等が、迫害を被つたのである。そこでその渦中に在つて王の心が親齊に傾いた時には屈原等が一度位を退いた後も亦起用せられ、親秦に向つた時に於ては疎せられ、逐はれたものと考へられる、そこで抽思悲回風等の作は、親秦氣分が濃厚な時懷王のために逐はれて漢北に行つた時の作であらうと思はれる。次に哀郢を見れば、「民離散而相失兮、方仲春而東遷。」「出國門而軫懷

兮、甲之朝吾以行。」「去故郷而就遠兮、遵江夏以流亡。」「背夏浦而西思兮、哀故都之日遠。」等の句がある。郢都を去つて東に赴いた事を示すものである。或年の二月甲日に屈原は都を出でて東に遷つたのである。又涉江には「乘鄂渚而反顧兮、欸秋冬之緒風、步余馬兮山皋、邸余車兮方林、乘船船余上沅兮、齊吳榜而擊汰、朝發枉渚兮、夕宿辰陽。」「入淑浦余儵側兮、迷不知吾所如。」等の句がある。これは鄂渚から西南行して楚都に近づき、更に南行して淑浦に行つた事を示すものである、哀郢に「九年而不復」の語がある、これは恐らく九字は不定的に用ひたもので數年をかく言つたのであらう。此等によつて考ふれば頃襄王の初年に逐はれて東に行き鄂渚の邊に數年を送り、「曼余日以流歡兮、冀壹反之何時、鳥飛反故郷兮、狐死必首丘」と郢都の空をなつかしみ思ひて自らこゝを舟出して庭のはとりに至り、長江に遵ひて行かば郢都に至るべきを思ひなやみては其路に走る事も得せず。又南して沅水を渡り、遂に淑浦に至りしならん。かくて淑浦に留る事しばし又北行して洞庭に至り、愈心を定めて懷沙一篇を賦して、汨羅に沈んだのであらう。これ我等が屈原傳及九章の數篇によりて想像せる屈原の略傳である。彼の九章は實にこの苦しき放浪のうちに成つたものである。屈原汨羅に入水の説を打消す學者が和漢共にあるのであるが、これ等は屈原程の人物が水死する筈がない、汨羅に沈んだといふのは實際に沈んだのではないといふ屈原の人物を崇拜する念より發したもので、何等證據あるものでない、屈原が死後の事については種々の傳説が拾遺記とか、異苑とかに出てゐる、續齊

諧記には、屈原以五月五日、投汨羅而死、楚人哀之、每於此日、付竹筒貯米、投水祭之、漢建武中、長沙歐回、白日忽見一人。自稱三閭大夫、謂回曰、見祭甚美、但苦爲蛟龍所竊、今若有惠。可以楝葉塞莖。以五綵絲縛之、此二物蛟龍所畏、回依其言。今人作櫻子以此、蓋其遺風也。これ亦彼か生前黨人に苦しめられしことを傳説化せるもの、やうである。屈原は清白の士である。熱情の人である。君を思ひ國を憂ふるの人である、が決して矛を執つて君側の姦を清むる底の人ではない、かゝる人であればこそこれを詩賦に寓して、其の意を小雅に繼いだのである。又屈原は決して老莊思想に浸染した人でもない。漁父や遠遊にそれ等の思想が見えてゐるもの、それ等は畢竟彼が苦慮煩悶の結果こゝに暫く魂を安んずる地を見出すかの様に、假に定めたのである。其底を流れるものは、却つてこれと反對の執着である。であればこそ彼は遂に石を抱いて汨羅に投じたのである。(未完稿)

(大高文乙二組綴誌「青於」第二、三號所載)

